



説教要旨「当たり前前の恵み」

マルコによる福音書 4章26～32節

「神の国」と言うと、死んだ後の世界を思い浮かべがちです。しかし、イエス様が伝えようとしておられる神の国は、死んだ後の世界のことだけではありません。「神の国」とは、人間の力がおよばない場所であり、神の支配する場所です。神に支配されているのはなにも死後の世界だけではなく、今わたしたちが生きているこの世界も全て、神は支配しておられるのです。

イエス様は「神の国」を、成長する種にたとえました。種をどうやって成長して実を結ぶのかを知らなくても、実が熟せばそれを収穫します。目には見えなくても確かに神の力がそこに働いていて、わたしたちは養われているのです。イエス様はこのたとえ話によって、人間の当たり前前の恵みが神の力によって成り立っている現実を目を向けるように促しておられます。またイエス様は「神の国」をからし種にもたとえます。からし種はとても小さな種で、道ばたにその種を落としたら、そうそう見つけれられないでしょう。そんな小さな種が、やがて信じられないほどの大きさに成長して葉を茂らせ、空の鳥が葉の陰に巣をつくるほどになるということです。今は神の国は隠されており、目に見えないので、多くの人々はそれに見向きもしません。しかしからし種一粒のような神の国が、成長してどんな野菜よりも大きくなり、鳥がその葉陰に巣を作るようになる、それはただ大きくなるというだけでなく、人々がそこに平安や安心を見出す拠り所となるということです。

神の国は、どこかに遠くにある場所ではないし、何か条件を満たせば入場できるような場所でもありません。わたしたちは既に神の国、つまり神の支配する世界に生きています。そしてその神様は、わたしたちの日々の営みのなかに当たり前前に働きかけておられるのです。あまりにも当たり前すぎて、わたしたちはそれが神の働きであることになかなか気づけないで、「神様はなにもしてくれない」とぼやいてばかりいます。そんなわたしたちにイエス様は語りかけます。「神はあなたを養っておられる。そのことに目を向けなさい。」と

(2022・2・6 説教者：稲垣真実)